

表層浮魚礁（パオヤ）の設置試験

前田 訓次 ・ 渡辺 利明

1. 目 的

昭和57年に引き続き、表層浮魚礁を設置し、その集魚効果、漁獲効果および耐久性についての調査を実施した。

2. 方 法

昭和58年7月22日に伊江島灯台より真方位310.5°、距岸35.2km、北緯26°55.95′、東経127°29.37′
ロランA（2H5 1327.8、2S7 1277.5）、水深720mの地点に孟宗竹製の浮魚礁を1基設置した。（図-1、2）

設置および調査には図南丸（216.09トン）を使用した。

また、関係漁協に浮魚礁利用状況調査表を配布し、記帳を依頼し、漁期終了後回収して取りまとめた。

3. 結 果

7月22日設置時の流向流速は142°、0.9ktであった。第1次調査を10月5日に実施したが、浮魚礁は流失していた。これは台風10号（9月25日～26日接近）によるものとおもわれる。なお、台風10号接近時の那覇における最大風速は南東24.9m/秒、最大瞬間風速は東南東50.0m/秒であった。

当業船による利用状況については、本部漁協から報告があり、8月23日に曳縄漁船（3トン）1隻がシビ（1～1.5kgもの）25kg、サワラ（1kgもの）5kg、シイラ（3～5kgもの）10kgを、9月3日にカツオ1本釣漁船（49トン）1隻がシビ（1.5kgもの）20kgを漁獲している。

4. 考 察

以上のことから、孟宗竹1本でも集魚効果があり、漁獲効果があることがわかった。

流失した原因については、今回作製した浮魚礁は孟宗竹1本を縦に設置したためか、風および波浪による影響をフロートの位置でまともに受ける構造になっていたこと、竹自体が水分を吸収し弱くなっていたこと、使用したロープが新品でなかったことなどが考えられるが、不明である。今後、縦型構造にする場合は、孟宗竹は耐久性がなく不向きであるので、強度のある電柱などがよいとおもわれる。

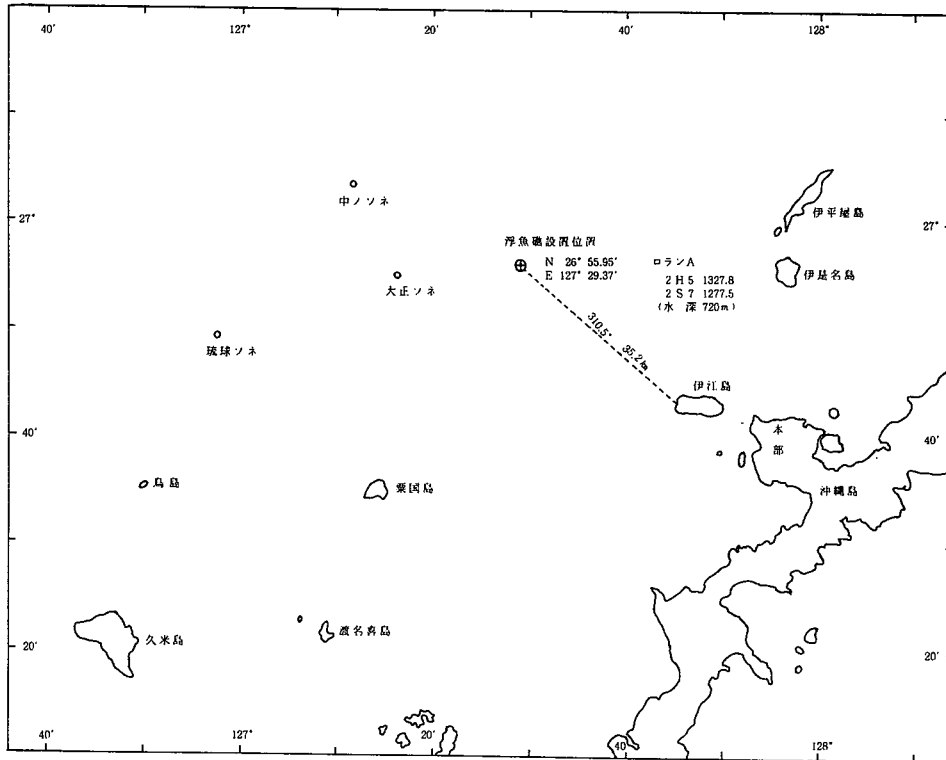


図 - 1 浮魚礁設置位置図

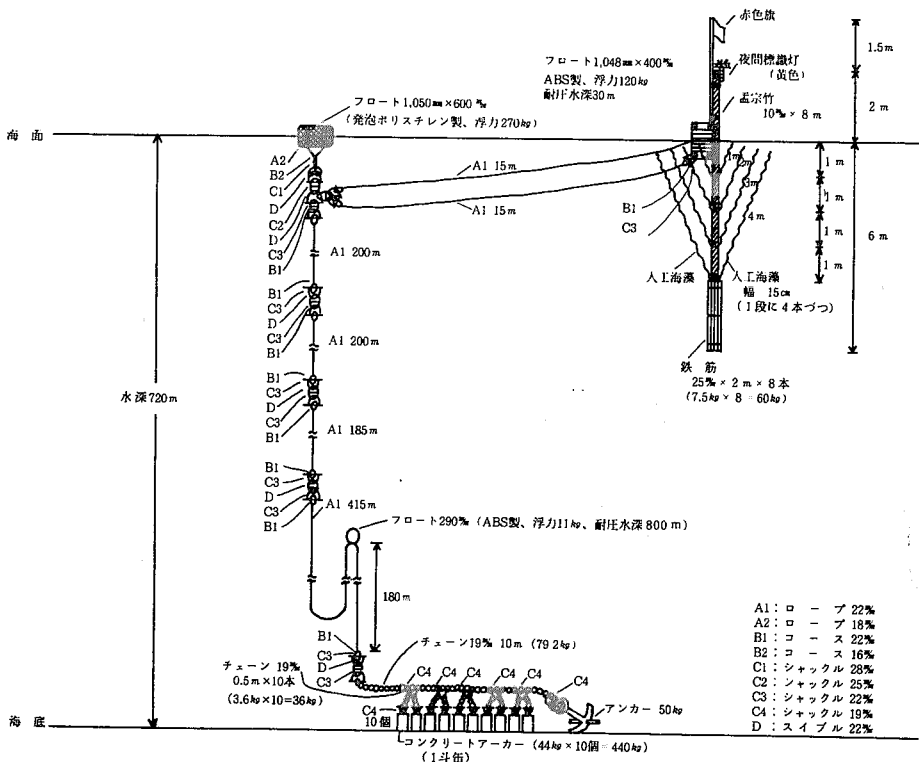


図 - 2 浮魚礁の構造